日曜日之説

柏原孝章

青空文庫

維新の後、一異様の日を出現し来れり。その名称いまだ一定せず、曇濁といい、損徳といい、また呑泥という。みな西音の転訛にして、日曜日の義なり。それ日曜は七曜の一にして、毎週の首なり。これをもって毎歳必ず五十日あり。この日や、縉紳先生より開化処士、青年書生に至るまで、柳を訪い、花を尋るの期となせり。ゆえに妓楼、酒店にありては、古のいわゆる門日、物日に比す。

按ずるに、耶蘇教の人は古来この日をもって教祖蘇生の日となせり。しかれども、元ヘーデン宗の人大陽を神なりとして、これを祭祀するの日となせしをもって名称の起るところとす。猶太宗の人もまたこの日をもって礼拝日となせり。古え希臘の一帝あり、この日をもって神を祭るべきを公布せしより、ついに世間普通の祭日となるに至れり。晩近に及て、これを非する説ますます盛なりという。これによりてこれを見れば、奉教の人この日にあたり、安息して独を慎み天を敬するがごときは、もとより可なり。しかれども、いまだこの日をもって、放肆遊蕩すべきを聞かず。しかるに邦人語意を誤解し、はなはだしきに至ては、嫖蕩放肆の義となす者また尠なからず。

余一日、家童、門生の業を抛ち学を廃するを見、その故を問う。皆云う、今日日曜日なり、これをもってかくのごとしと。余おもえらく、わが邦の人、学術・品行ともに西人に後るる、あにただ数里の外のみならんや。いま人をして日夜馳駆せしむるも、なお数十年の後にあらずんば、その地位に達せず。しかるをいわんや、毎週必ず一日の光陰を消耗するにおいてをや。けだし縉紳先生は功成り名遂るの人なり。開化処士もまた自ら見るところあるべし。青年書生のごときは、成業を将来に期すべき者なり。いずくんぞ放肆、自棄、かの両者の顰に倣うべけんや。日曜の数一歳すべて五十日、積て十年に及べば五百日あり、二十年にして千日あり、三十年にして千五百日あり、すなわち四歳有一月の光陰なり。いやしくもこの光陰をもって、これを勉強に施さば、中人といえどもまた必ず一事業を成すに足んか。余ここに感ずることありて、日曜日の説を作る。

青空文庫情報

底本：「明六雑誌（下）〔全3冊〕」岩波文庫、岩波書店
　　2009（平成21）年8月18日第1刷発行
底本の親本：「明六雑誌　第三十三號」明六社
　　1875（明治8）年4月6日刊行
初出：「明六雑誌　第三十三號」明六社
　　1875（明治8）年4月6日刊行
※表題は底本では、「〇日曜日之説」となっています。
※校注者による冒頭の解説は省略しました。
※校注者による脚注は省略しました。
入力：田中哲郎
校正：岡村和彦
2020年3月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日曜日之説

柏原孝章

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/